夏目漱石

まず、漱石の年譜を確認する。漱石は江戸に生まれた。薩長に征服された側だ。武士ではなく名主階級だ。二松学舎などで漢学を学び東大予備門に入る。これは江戸以来の漢学の伝統の中にあったということか。在学中に東大は帝国大学となり帝国建設のための人材養成機関となった。漱石はそれが不本意だったとの説あり。日清戦争では戸籍を北海道岩内に移し徴兵逃れをした。明治２８年に松山中学教師となる。明治２９年に熊本の第五高校教師となる。やがてロンドン留学を命じられた。当時大英帝国は世界最強でロンドンも最盛期だった。漱石はそこでヴィクトリア女王の葬列を見る。つまり大英帝国の栄光の頂点とその終わりの始まりを見る。ロンドンではカーライル博物館にも行った。カーライルはロンドンにいてイギリスの文化・文明を批判した人。漱石はロンドンで論文が書けず仲間から「発狂した」と言われた。「文学とは何か？」の根本問題に逢着し根本から再定義しようとしたと言われる。つまり多くの人が欧米先進列強（大英帝国など）を目指す頭しかないところで、漱石はその中に身を横たえ前近代と近代、西洋と日本の狭間に引き裂かれる思いをしながら、根本からものを考えたのだ。帰国し東京帝大の先生になる。大学では横文字の英語・英文学の研究と講義、自宅では日本風の部屋で山水画や漢詩文に親しむ、和洋折衷の二重生活だった。気を紛らわせるために書いた**『猫』**が大ヒット。**『坊っちゃん』**等も書く。明治４０年、東京帝大の教職を辞し朝日新聞社に。文芸欄を担当。彼の多くの小説は朝日新聞の連載である。ある時博士号を与えると言われ固辞した。明治天皇崩御、乃木希典殉死の際は、鴎外と違い、２年間温めて**『こころ』**を書いた。彼は鴎外（歴史小説を書いた）と違い最後まで現代小説を書いた。時代により倫理も変わる、新しい時代にふさわしい倫理は何か、を前のめりに追究し続けたと言える。彼は、薩長に征服された江戸に生まれ、漢学を志向し、徴兵を忌避し、大英帝国の矛盾を肌で感じ、官僚を途中で辞め、博士号を辞退した。明治国家の目指す西洋化・近代化・富国強兵路線に対し、果たしてそれでいいのか？　という根本的な（ラディカルな）問いを持ちえた稀有な突出した人物である。日本近現代最高の作家と言える。彼の弟子は**漱石山脈**と言えるほど多いが、**安倍能成**は戦後文部大臣となり、内村鑑三に影響を受けた天野貞祐らとともに、個人の人格の尊厳を重視する戦後教育の基礎を築いた。我々が安心して学校で学べるのも彼らのおかげかもしれない。

漱石の文明批評。**『三四郎』**の広田先生は日露戦後の日本を見て「亡びる」と言っているが、その予言の通り大日本帝国は火の海になって滅亡した。広田の予言から３７年後のことだ。**『それから』**の代助は東京を見わたし「敗亡の発展」と呼んだ。**『現代日本の開化』**では、急速な開化のゆえに人々は神経衰弱に陥る、と漱石は述べる。『こころ』でも、「自由と独立と己に満ちた現代」ゆえ「寂しさ」（Kは寂しくてたまらなくなって死んだのかもしれない）は不可避と看破し、それを越える道を模索する。では、現代においてはどうか？

『文展と芸術』では、「芸術は自己の表現だ」とする。ゆえに国家・社会が芸術に優劣をつけるのはいかがなものかと問う。芸術は、人格や社会を完成させるもの（孔子）か、芸術はストレス社会の気晴らしか、芸術は皆を幸せにするものか、「芸術は爆発だ」「芸術は呪術だ」（岡本太郎）なのか？

大正３年**『私の個人主義』**は、『こころ』と同時期。一つには、イギリスで「文学とは何か？」が分からなくなり五里霧中だったが、自力で突き止めるしかない、と考えた。「自己本位」の態度を握ってからは強くなった、とある。ここで①非西洋の日本主義、という意味ではないだろう。同じ日本人の他人の尻馬に乗るのは「自己本位」ではないから。②ロンドンにいた時から大正３年まで１０年以上たっている。ロンドンでの事実とは限らない。大正３年に当時を振り返ってこう説明しているのである。③「自己」は東洋の禅宗や武士道にもある。漱石は古い日本の土壌から持って来て、西洋の個人主義とぶつけて、新しい思想的展開を示したのかどうか。④自分の人生を生きたい。でも他人の評価に縛られて生きているかもしれない。サルトルは自由を説いた。だが、自分は本当に自由か？　さまざまの構造によって自分は規定されているのでは？　「やりたいこと」って何だ？　思い込まされているだけかも。では、「やるべきこと」は何か？　全体主義国家に命令されて「やるべき」仕事は、真にやるべき仕事と言えるのか？　しかし、一見困難でも、自分の「やりたいこと」で「やるべきこと」で「できること」は、きっとある。

漱石は学習院の生徒（その親は華族で、当時の支配階級）を相手に、他人の自由を尊重せよ、金と権力のある者は義務と責任を伴う、と言う。原爆やホロコーストは他人の自由を奪う。漱石の警戒したところだ。小森陽一も言っていた（金曜特別講座で質問した）。三宅雪嶺グループが漱石たちを徒党を組んで批判したが、今の時代にもある話だ。自由に自分の意見を表明する者は孤独でもある。弱い人は徒党を組み集団で襲い掛かる。意見表明の自由、思想信条の自由くらいは保証されないといけない。最近の報道・情報環境はどうか。

戦時中の軍国主義を経て、戦後に漱石は再読・再評価される。

（文学部読書会の話し合いをもとにした。）　図書研修課Ｙ